礼拝説教（2021 年３月 28 日）

説教者：中村信哉

全能者とは何なのか

ヨブ記 20-21 章

はじめに

一昨年から少しずつ旧約聖書の「ヨブ記」を学んでいます。今日は、20-21 章に書かれている内容から学びたいと思います。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持ち、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもが与えられているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるでしょう」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもたちを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言います。**「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」（ヨブ記 1:21）**。

するとサタンはもう一度、神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康が与えられているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるでしょう」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可します。するとヨブは、足の裏から頭のてっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。その結果、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、**「神を呪って死になさい」（ヨブ記 2:9）**と見捨てられ、ついに妻は神様への信仰を捨てていきます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。**「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいも受けるべきではないか」（ヨブ記 2:10）**。

ヨブは、財産を失い、子どもを失い、健康も失い、妻の信仰を失ってもなお、神様への信仰を捨てなかったのです。

2. 三人の友人

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めに駆けつけます。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、七日間（一週間）一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人は、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で 42 章まありますが、3-31 章までは、ヨブと三人の友人との討論が書かれています。その討論は、ヨブの災いの原因は何かという問題を巡っての討論です。

三人の友人は、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いよって報いを受けるというものです。善いことをすれば祝福を受け、悪いことをすれば裁きを受けるというものです。

三人の友人は、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと言うのです。だからヨブがもし、自分の罪を認めて悔い改めるなら、災いは終わり、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導くのです。

3. ナアマ人ツォファルの第二の言葉

11-14 章には、ナアマ人ツォファルとヨブの討論が書かれていましたが、20-21 章にも再びツォファルとヨブの討論が書かれています。

ツォファルは、20：2-3 でこう言います。**「こうだから、苛立つ思いが私に応答させるのだ。私の心の焦りのゆえに。私は自分への侮辱となる訓戒を聞く。だから、悟りを与える霊が私に答えを促すのだ」**。ツォファルは、自分のことを、悟りのある賢い人間だと思っています。そしてその賢さによって、これまでも「因果応報」の原理で、ヨブの災いの原因を説明し、罪を認めろ、悔い改めろと説得してきました。しかしヨブは 19 章で、そのように「因果応報」の原理でヨブを追いつめ、災いの原因はヨブにあると責め立てる三人の友人には、神様の裁きがあるだろうと言うのです。

この言葉を聞いたツォファルは、自分への侮辱として受け取り、ヨブに苛立ちを覚えるのです。そしてヨブのことを「神様を敬わない悪者」と決めつけて、ヨブにこそ神様の裁きがあるだろうと語っていくのです。

20：5 でツォファルはこう言います。**「悪しき者の喜びは短く、神を敬わない者の楽しみは束の間だ」**。「神様を敬わない悪者」の特徴は、高慢であり、貪欲であり、不正な方法で富を手に入れることです。それゆえ彼らは、一時的に繁栄はするけれども、長くは続かないと言うのです。なぜなら神様の怒りを買うからです。そして彼らはやがて、富を失い、家族も貧しくなり、病気になり、死を迎えると言うのです。

ツォファルの頭は、「因果応報」の原理で支配されています。ですから「神様を敬わない悪者」は、必ずこの世において神様の裁きを受けると信じて疑わないのです。たとえ彼

らが繁栄したとしても一時的であり、必ず災いに遭うと言うのです。

そしてツォファルは、この原理をヨブにも当てはめます。そしてヨブが財産を失い、家族を失い、健康を失ったのは、ヨブが「神様を敬わない悪者」であることの何よりの証拠だと考えるのです。「因果応報」の原理に支配されているツォファルにとっては、ヨブは「神様を敬わない悪者」にしか見えないのです。そして逆に、災いに遭っていない自分自身は、「神様を敬っている善人」だと思い込んでいるのです。そして上から目線でヨブを裁き、見下し、ヨブを教え導こうとしているのです。

4. ツォファルに対するヨブの言葉

そのようなツォファルに対して、ヨブは 21：2-3 でこのように言います。**「私の言い分をよく聞いてくれ。それを、あなたがたから私への慰めにしてくれ。まず、この私が話すのを許してくれ。私が話し終わってから、あなたは嘲るがよい」**。ヨブはツォファルを始め三人の友人に対して、とにかく自分の話を聞いてほしいと訴えます。自分の話を最後まで聞いてほしい、最後まで聞いた上で意見を言ってほしいと言うのです。そしてヨブにとっては、自分の話を最後までよく聞いてくれることこそが、何よりの「慰め」なのです。

ツォファルを始め三人の友人は最初、災いの中で苦しむヨブを「慰め」に駆けつけました。しかしヨブの言葉を聞いているうちに、「因果応報」の原理でヨブの災いを解釈し、ヨブを「神様を敬わない悪者」と決めつけるようになりました。そしてヨブを、自分の罪を認めない「頑なな者」と見て、何とかヨブに罪を認めさせ、悔い改めさせようと必死に説得するようになりました。その結果、ヨブの言葉が耳に入らなくなり、ヨブのどんな言葉も、所詮「神様を敬わない者」の言葉だ、「頑なな者」の言葉だと考えて、まともに聞こうとしなくなりました。その結果、ヨブを「慰め」るどころか、ヨブを益々追いつめ、苦しめることになったのです。

ヨブと三人の友人のやり取りを見て、教えられることの一つは、試練や苦しみの中にある人にとって何よりも「慰め」となるものは、誰かに自分の言い分を最後までよく聞いてもらうことだということです。ツォファルを始め三人の友人は、「因果応報」の原理に支配されていて、ヨブを否定し、ヨブの言葉が耳に入らなくなっていました。ヨブの言葉に耳を傾けるよりも、ヨブを正そうとすること、ヨブを説得することに必死になっていました。その結果、彼らはヨブを慰めるどころか、さらに苦しめることになったのです。

私たちももしかしたら、三人の友人と同じことをしているかもしれません。自分で勝手に誰かの苦しみの原因を決めつけ、その人を裁き、正そうとして、その人をさらに苦しめていることがあるかもしれません。試練や苦しみの中にある人にとって、何よりも「慰め」になること、それはその人の言い分を最後までよく聞いてあげることです。私たちは、自分の価値観に従ってその人を見て、裁きながら、否定しながら聞くのではなく、まず自分の価値観を置いておいて、真っ新な心で、精一杯その人の言葉に耳を傾けることが大切なのではないでしょうか。本当に話を聞いてもらったという感覚は、試練や苦しみの

中にある人にとって、大きな「慰め」となるのです。

ではヨブはツォファルに対して何を語るのでしょうか。ヨブは７節でこう言います。**「なぜ悪しき者が生きながらえて、年をとっても、なお力を増し加えるのか」**。ツォファルは、「因果応報」の原理に立って、「神様を敬わない悪者」は、必ずこの世で神様の裁きを受け、災いに遭うと主張しました。しかしヨブは、この世の現実は必ずしもそうなってはいないと言うのです。「神様を敬わない悪者」であっても、多くの財産を蓄え、多くの家族に恵まれ、幸せに寿命を全うする人が沢山いるではないか、というのです。

20：14-15 にあるように、「神様を敬わない悪者」は神様に向かってこう言います。**「私たちから離れよ。私たちはあなたを知りたくない。全能者とは何なのか。私たちが仕えなければならないとは。どんな益があるのか。私たちが祈り願ったところで」**。彼らは神様を信じないし、求めてもいません。しかし彼らは、財産や家族や健康に恵まれ、幸せに寿命を全うして死んでいくことがあるのです。そういう現実が確かにあるのです。「神様を敬う善人」は必ず幸せになり、「神様を敬わない悪者」が必ず不幸になるというのではなく、「神様を敬う善人」が苦しみ、「神様を敬わない悪者」が順風満帆に生きる、そういう現実だってあるのです。この世の現実には、「因果応報」の原理では説明できないようなことが沢山あるのだとヨブは言いたいのです。この世の現実は、「因果応報」の原理だけで単純に説明できるものではない、この世の現実はもっと複雑で、不条理で、矛盾の多いことが沢山あるのだとヨブは言いたいのです。しかしツォファルを始め三人の友人は、この世の現実をすべて、「因果応報」の原理で単純に説明しようとし、ヨブの災いも神様の御業もすべて、「因果応報」の原理の中に押し込め、解釈しようしたのです。

<u>おわりに</u>

神様は永遠の昔から御計画をもっておられ、その御計画に従って世界と私たち人間を造り、今も世界全体と私たち人間の人生を、その御計画に従って導いておられます。

「因果応報」の原理は、時代と文化を越えて、すべての人間の心の中にある原理です。これは神様が、人間の心に植え付けられたものです。この「因果応報」の原理に基づいて、人間社会の秩序が保たれてきたと言えます。しかしこの世の現実は、必ずしも「因果応報」の原理で説明し切れるものではありません。「悪者」が繁栄し、「善人」が虐げられることだって沢山あります。「神様を信じる者」が苦しみ、「神様を信じない者」が順風満帆に生きることだって沢山あります。この世の現実は、「因果応報」の原理ですべて説明し切れるほど単純ではなく、複雑で、不条理で、矛盾に満ちたものです。私たちは、この世の現実の意味や原因が分からないことが沢山あります。

私たちが間違えてはならないことは、この世の現実を「因果応報」の原理だけで説明しようとして、試練や苦しみの中にある人を裁いたり、自分自身を裁いたりすることです。そして益々、試練や苦しみの中にある人や自分自身を追いつめていくことです。

そして私たちがやらなければならないことは、この世の現実を「因果応報」の原理だけで

説明しようとするのではなく、まず試練や苦しみの中にある人の話に耳を傾け、精一杯最後までよく聞いてあげることです。裁きながら、否定しながら聞くのではなく、真っ新な心で聞くことです。そうしてその人を「慰める」ことです。

そしてもう一つは、試練や苦しみの中にある人の言葉をよく聞くだけでなく、神様の言葉をよく聞くことです。私たちは「因果応報」の原理に支配されて、神様の言葉さえも聞けなくなってはなりません。神様の言葉よりも「因果応報」の原理を大切にしてはなりません。神様の御計画、摂理の御業は、必ずしも「因果応報」の原理で説明し切れるものではありません。神様の御計画、摂理の御業は、私たち人間の頭に収まり切るものではありません。もっと複雑で、私たちの理解をはるかに超えています。私たちには分からないことが沢山あるのです。分からないことは分からないことにしておき、無理に「因果応報」の原理で説明しようとしないことが大切です。

神様は聖書を通して、今も私たちに語りかけています。そして神様の言葉こそ、試練や苦しみの中にある人を、本当に「慰め」てくださいます。試練や苦しみの中にある時、私たちはその渦中の中にある人の言葉にしっかり耳を傾けること、そして神様の御言葉にしっかりと耳を傾けること、この二つが私たちにとって「慰め」となるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

この世の現実は複雑で、不条理なこと、矛盾に満ちています。しかし私たちは、あなたが御計画をもっておられ、その御計画に従って世界全体と私たちの人生を導いておられることを信じています。私たちの心には、生まれながらに「因果応報」の原理が働いています。そのため、私たちの身に起こるすべてのことを「因果応報」の原理で理解しようしてしまいます。そして時には、人を裁き、自分自身を裁き、追い詰めてしまいます。

しかしどうか私たちが、あなたの御言葉と苦しみの中にある人の言葉に、冷静に、また真剣に聞くことができる耳を与えてください。私たち自身が「慰め」をもたらす存在となることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。